

「人のためにも、次世代のためにも」

明治 22 年 8 月、奈良県吉野郡十津川村を豪雨が襲い、村に未曾有の被害を及ぼしました。家を失い、仕事を失った 600 家族、2600 人は、新天地を求めて北海道へ移住することになりました。この事実を元に、その移住団の中にフキという名の 9 歳の少女がいたという設定で書き始められた『新十津川物語』は、11 年をかけて原稿用紙 4000 枚の長編小説として出版されました。そこにはフキが 80 歳になるまでの 70 年が描かれています。

この物語は、NHK テレビでドラマ化もされました。ドラマは好評でしたが、原作者である川村たかしさんは、ドラマの中の、人間と自然の解釈に不満を感じたといいます。その解釈とは、「自然は豊かだが厳しい。そして人間はたくましい」というものです。ところが、ドラマではフキが「お天道さんに復讐してやる」「太陽や風に仇討ちをする」ために戦うという展開になっていきます。川村さんは、人が太陽や風を相手に戦うなどと、それほど傲慢になってはいけないというのです。

物語の終わりで、フキの村は再び洪水に見舞われます。そのとき、フキは知らず知らず水田の中にひざまずいて祈っていました。洪水の中で、そうするしかないほど人間は無力なのです。川村さんは、こうした祈りの姿こそ、自然の中に生を受けた人間の、元のかたちではないかといいます。そして、次のように記しています。

「二十世紀は戦いの世紀だった。二つの大戦も含めて、憎しみが渦巻いた。また、豊かさを求めて自然を征服しつづけた。いや支配して奪いつづけた。二十一世紀は反転して、祈りの世紀でなければならないと思う。戦う相手は遠くにいる敵ではなく、自らの内にある、果てもない欲望ということになる」(川村たかし著『風の声 土のうた』天理教道友社刊から)

自然は時に、厳しい試練を与えますが、豊かな稔をもたらしてくれます。人間は昔から、そうした自然を畏れ、敬いながら暮らしてきました。しかしいつの間にか、そうした自然に対する畏敬の念を失ってしまったのではないのでしょうか。

より豊かに、より快適にという人間の欲には際限がありません。その、自らの内にある欲望に打ち勝つためには、自然の恵みを、感謝して頂くという心が大切です。そして、自分さえ良ければ、今さえ良ければというのではなく、人のためにも、次代のためにもと考えることです。

自然の恵みに手を合わせながら、感謝と慎みの心を持って暮らしたいものです。